未来を担う職員が育つ場所

大学行政管理学会（ＪＵＡＭ）からの招待

出会いが広げる視野、学びが深める楽しさ

国立大学法人香川大学　西山真希

【はじめに】

私は2012年8月に国立大学法人群馬大学に採用されたことから大学職員としてのキャリアを歩み始めた。文部科学省（行政実務研修生）や大学改革支援・学位授与機構への出向を経て、現在は国立大学法人香川大学で勤務しており、医学部附属病院において経営企画・分析に関する業務に従事している。

これまでの職務経験を振り返ると、常に誰かとの出会いや、偶然の学びに支えられてきた。大学職員としての成長は、職場内外の先輩や同僚との関わり、思いがけず得られた知識や気づきによって形成されてきたと言える。そして、それらの出会いや学びは単なる業務知識の蓄積にとどまらず、「面白さ」や「楽しさ」として自分自身の糧になってきた。

しかし、所属組織や業務内容が変化する中で、学外との接点は次第に減少していった。特に現在の職場に異動してからはその傾向が強まり、自ら学びの場を求めなければ、日常業務に閉じた視野に陥るという危機感を覚えるようになった。さらに、大学業界を取り巻く昨今の状況に加え、地方国立大学の職員という立場にあることで、大学組織だけでなく、職員個人としての生き残りについて意識せざるを得ない状況ととらえている。

【ＪＵＡＭとの出会い】

大学行政管理学会（以下、「ＪＵＡＭ」という）の存在は、ＳＮＳやメーリングリストを通じて知った。当初は名称から、一般的な「研究者中心の学会」をイメージしており、実務中心の自分には敷居が高いと感じていた。しかし、「新たな知識」「多様な視点」「人との出会い」による学びを求めていたことや、偶然の出会いにも恵まれたことをきっかけに3年ほど前に加入を決めた。

【加入後の関わり】

加入後は、研究発表や報告といったアウトプットは行っておらず、研究会や地区企画への参加も限定的である。参加の多くはオンラインイベントにとどまっており、学会活動の中では周縁的な立場にある。しかし、こうした「ゆるやかな関わり方」であっても、ＪＵＡＭで得た出会いや気づきは、自分にとって確かな価値を持っている。

特に印象的なのは、実務報告や研究発表の後に行われる質疑応答である。報告や発表の事例自体も非常に示唆に富むものばかりだが、それに加えて発表者に寄せられる問いかけを聞く中で、自分とは異なる立場や視点を持つ参加者の存在を実感する。そうしたやり取りから、「なるほど、そう考えるのか」と新しい視座を得る機会が度々あった。こうしたやり取りは、業務に追われる日常では味わえない「刺激」と「楽しさ」を感じる瞬間であった。

昨年度の研究集会は「JUAM Pes」と銘打って開催され、初参加者であっても心理的ハードルが低く、参加しやすい雰囲気だったのが印象に残っている。「研究集会」という言葉に対して抱いていた堅苦しい印象が払拭され、学会活動に対する考え方が大きく変わる契機でもあった。また、唯一参加した対面イベントとして、中国・四国地区研究会に参加した際には、自分の関心を持ち寄った参加者同士で自然と情報交換が生まれ、普段の業務では得られない視点やヒントに触れたことが「楽しさ」につながった。

また、これまでに参加したイベントで特に印象的だったのは、ベテラン会員が自身のキャリアを語る企画である。そこで紹介された「計画的偶発性理論」は、自分のこれまでのキャリアや経験と重なり合う部分が多く、これまでの出会いや学びの積み重ねが、偶然を必然に変えていく原動力であったと気づかされた。そしてその過程には、常に「楽しい」と感じられる瞬間があった。

【国立大学の職員としての気づき】

ＪＵＡＭには、国公私立の多様な大学から職員が集まり、設置形態を越えて意見を交わしている。私自身はこれまで国立大学法人や、国立大学の職員が多く所属する組織に所属してきたが、ＪＵＡＭを通じて私立大学職員との意見交換を通じ、制度や文化、意識や視点の違いに気づく経験が得られた。とりわけ、中教審答申を題材とした対話の中では、大学を取り巻く構造的な課題を多様な視点から考える機会が得られ、視野が広がった。このような立場や背景を超えた学びは、所属大学の組織の枠内ではなかなか得がたいものである。

国立大学法人の職員であれば共感いただけるかもしれないが、職位別の研修や業務別の研修では、ごく一部を除いて国立大学間で完結することが多く、他設置者との接点は限られている。地域連携プラットフォームや大学間連携推進法人等の仕組みによって国公私の連携は形として進んでいるが、実際に職員として連携先大学と関わる機会は依然少ない。そういった中で、同じ大学職員として設置者の壁を越えて意見を交わせる機会は貴重であり、ＪＵＡＭならではの価値と考える。

現在、自身が担当している国立大学の病院経営に関する実務は、「大学」ではないある種特定の専門性を要する業務でもあるが、ＪＵＡＭに参加することで得られる学びはそれと無関係ではない。異なる部署、異なる大学の職員が語る実務や視点は、組織経営を考えるうえでの応用的なヒントとなる。ＪＵＡＭは、分野を越えた「実践知」が交流する貴重な場であると感じている。

【今後について】

ＪＵＡＭの企画は比較的オンライン開催が多いことが私にとっては参加のハードルを下げてくれている。場所や時間の制約を越えて、多様なテーマにアクセスできることは、地方を拠点とするものとしては非常にありがたく、情報などへのアクセスの格差を埋めてくれる。

一方で、対面での企画では、現場に身を置くことで生まれる「偶然の出会い」や「雑談の中の学び」の価値を改めて実感した。今後は、様々な制限はありつつも、テーマに惹かれたら対面の場にも積極的に参加したいと考えている。

とはいえ、コロナ禍も落ち着き対面開催も増えたことから、テーマに興味を持ったものの遠方開催や日程によって断念したものも数知れずある。講演やパネルディスカッションなどに関してはオンライン併用も検討いただけることを望んでいる。

ＪＵＡＭは非会員が参加できる企画が多く、外部に開かれた学会である。真摯に研究に取り組み積極的に発表する会員も多く尊敬しているが、私のように「ゆるく楽しむ」かかわり方もまた一つのスタイルである。本稿を読んでＪＵＡＭに少しでも興味を持たれた方がいたら、イベントに参加してみてほしい。特に、同じ境遇にある国立大学職員には心からおすすめしたい。

これまでに得た学びや出会いの多くは、振り返ればいつも「楽しい」と感じた経験だった。ＪＵＡＭでの交流や学びも同様に、自分にとっての「楽しさ」に直結している。知的な刺激を受けること、人と語り合うこと、視点を揺さぶられること――そのすべてが、自分を前に進める力になっている。今後は、無理のない範囲で、インプットとアウトプットのバランスを意識しつつ、今後も自分なりの関わり方で学会活動を続けていくつもりである。

【最後に】

ＪＵＡＭには、多くの経験豊富な会員が在籍している。そうした中で、自分が何かを語れるのかと不安を覚えることもある。しかし、無理にアウトプットを求められることはなく、「知らないことを知る」「違う視点に触れる」こと自体に大きな意味があると感じている。そして何より、その学びの過程そのものが、純粋に楽しいのである。なぜなら、楽しいは正義だから。

関わることで広がる世界

京都文教大学・短期大学　山中　耕

【業務とアンテナ】

私は、卒業と同時に母校である京都文教大学に入職し、今年で25年目を迎える。これまで、入試広報業務を皮切りに、ＧＰ事業の推進、研究支援、免許・資格業務、就職支援、教学企画、学長室業務、アドミッションなど、大学内のさまざまな部署で職務を担当してきた。

様々な業務に取り組む中で大切にしてきたことの1つが、「アンテナを張る」という姿勢である。最初の配属が入試広報課だったこともあり、高校訪問を通して話したことや肌で感じたこと、高校生の進学相談のやりとりから感じること、また大学に来られる営業担当者との情報交換など、大学の外から得られる情報に触れる機会が多かったことが、そのベースとなっている。

学内にある情報だけでは判断に迷うことも多い中で、現場の空気や他大学の動き、地域性や制度の変化など、外部に幅広くアンテナを張ることで、自分なりの価値観や判断基準をかたちづくってきた。普段から単なる情報収集ではなく、多様な声や視点に耳を傾け、そこで得られたもの、感じたことなどを、自分の中で咀嚼して意思決定につなげることを、今でも常に意識している。

こうしたスタンスは、特に新しい取り組みを行う場面で力を発揮してきた。新規の事業や制度への対応、あるいは部署の立ち上げやてこ入れといった業務を、それなりにこなしていくことができたのも、この、常に「アンテナを張る」という営みによるところが大きかったように思う。

【ＪＵＡＭとの距離感】

私と大学行政管理学会（ＪＵＡＭ）との関係も、この「アンテナを張る」という意識によって生まれたと言ってよい。

ＪＵＡＭの存在自体は以前から知っていた。それどころか、本学にはＪＵＡＭで活発に活動している先輩職員がおり、活動の様子や他大学の職員とのネットワークから得られる情報についても、身近で聞くことができた。しかし、自分自身が主体的にそこに所属して活動するイメージがわかず、なんとなく距離を置いていた。精力的に活動する背中を見て、自分には同じようにはできないと、敬遠していたのである。あくまで「間接的な関わり」で満足していた部分があった。

しかし、その先輩が別キャンパスに異動になったことにより、状況が一変する。これまで、先輩を通して得られていた情報やつながりの多くが一気になくなり、情報源やネットワークが絶たれた。このままでは、自分自身の視野も、職場全体の視野も狭くなってしまうのではないか――。そんな危機感にも近い感覚から、自分で動くしかないと半ば義務感のようなものに駆られた結果、2022年5月にＪＵＡＭへの入会を決心した。

【アウェイ感に打ちのめされる】

とはいえ、入会してすぐに何かが変わったわけではなかった。逆に、入ってみたものの何をどうすればいいのか分からず、最初はメールで届く研究会の案内を眺めるだけの日々が続いた。気になる研究会やセミナーなどの案内があっても、具体的な内容や雰囲気が見えず、どんなスタンスで参加していいのかも分からない。せいぜいオンライン参加してカメラオフで話を聞くだけといったかたちで、今ひとつ踏み出せないままだった。

さらに、唯一対面で参加した東京での総会・研究集会でも、孤独を味わうこととなった。数少ない他大学の知り合いとしか話せず、彼らも既にできあがっているコミュニティの中にいる。場に馴染めないアウェイ感や孤独感だけ残った。一日目が終わったあと、一人でホテルまで歩いて帰った吉祥寺の街の空気が忘れられない…。そんなこんなで自ら動くきっかけがつかめないまま過ぎていった。

【アウェイからホームへ】

入会からちょうど1年が過ぎ、どうしたものかと思案していたとき、たまたま目にとまったのが、「ＪＵＡＭで語ろう」という企画だった。若手や入会間もない会員を対象に、ざっくばらんに話せる場をつくるという企画で、今の自分にまさにぴったりだと感じた。それでも参加を迷っていたところ、偶然にも前年の研究集会で同じグループになった方から「ファシリテーターをやってみませんか」と声をかけてもらった。自分に務まるのかどうか、不安がなかったわけではない。それでも、たまたま声をかけてもらったこと、そして「何かやってみるキッカケにはちょうどいいかもしれない」と思い、思い切って手を挙げた。

事前の打ち合わせはオンラインで数回のみ。あっという間に当日を迎えた。初めて足を踏み入れる東京の大学のキャンパス、当日初めて対面で会うメンバー、そしていきなりトークセッションを回さないといけないという不安で、相当に緊張していた。いざ始まると、なんとか役割を果たそうと必死で、何を話したかも正直なところ全然覚えていない。しかし、終わってみると、参加者のみなさんの反応や、一緒に進行した方々とのやりとりが心地よく、疲れよりも「やってよかったな」という充実感が残った。

その後、同じ企画をこの年の研究集会の分科会でも実施した。前年、アウェイ感に打ちのめされた研究集会である。しかし、この時は会場に入った瞬間から違う空気を感じた。顔見知りが増え、向こうから声をかけてもらえたり、自分からも参加者に声をかけたりと、居心地の悪さはすっかり消えていた。会の進行も初回よりは余裕を持って進められたように思う。

このとき、「あ、ＪＵＡＭがホームになった」と思った。見える景色が一気に変わったように感じた。

【自分なりの関わり方】

いまは研究・研修委員会の一員として、「ＪＵＡＭでの活動の入り口をつくる企画」に関わったり、関心のあるテーマで研究会（「マネージャー（管理職）としての成長・実践研究会」）の立ち上げを仲間と進めたりしている。

また、自分が味わった孤独感を、他の人にはできるだけ味わって欲しくないという思いから、研究集会の情報交換会で「お一人様・初心者テーブル」を作り、既存会員との交流の場づくりをしたり、ソロ参加者に向けた二次会を企画するなど、自分の経験を活かして、次の人の背中を押すことに、特に力を入れている。

自分なりのペースで関わりを続けられているのは、企画を一緒に考えたり、支えてくれる仲間の存在が大きい。ＪＵＡＭで出会った人たちが少しずつ自分のまわりに増え、そのつながりが楽しさや安心感につながっている。

【〝2.5プレイス〟みたいな距離感】

私にとってＪＵＡＭは、大学の業務に必要な「アンテナを張る」場であるとともに、それだけではない意味を持つ場になってきた。ここで出会った仲間たちとの時間は、今の自分にとって、もうひとつの居場所のような存在になってきている。しかし、私にとってこれは、最近よく耳にする「サードプレイス」というより、職場でも趣味でもない、仕事の延長線でありながら、ちょうどいい距離と温度で関われる不思議な心地よさがある、〝2.5プレイス〟みたいなものになっている。

ＪＵＡＭでは、地区別やテーマ別の研究会など、年間を通してさまざまな企画がある。非会員でも参加できるものもたくさんあるので、まずは気になる研究会やイベントなどから気軽にのぞいてみることをオススメする。私も最初は、どう関わればいいのか分からず、距離を感じていたひとりだった。でも、ふとしたきっかけから一歩踏み出してみたことで、そこから少しずつつながりが生まれていった。

読者の皆さんにとっても、ちょっとしたきっかけがＪＵＡＭの中に転がっているかもしれない。

ＪＵＡＭとの関わり、これまでとこれから

国際基督教大学　浮洲歓南

【新卒から中堅まで多様な職員が集う】

私は現在、ＪＵＡＭの研究会の一つである大学改革研究会に所属し、関東支部における副支部長として活動している。本稿では、私がＪＵＡＭにどのように関わり、その中でどのような学びを得てきたのか、また業務にどのように還元されているかについて紹介したい。

ＪＵＡＭを知ったのは、入職して2年目の頃である。直属の上司であり、現ＪＵＡＭ事務局長の橋本明子氏から、他大学職員と交流できる場として大学改革研究会のイベントを紹介された。私は新卒職員として入職し、主に職場内で実務を通して大学での仕事について学んでいたため、学外からも学び、視野を広げてほしいというメッセージとして受け止めた。当時も今も、私や同僚の成長を支援してくださる暖かな心遣いに感謝している。

当初はコロナ禍ということもあり、オンラインでのイベント参加が主であったが、やがて対面での参加が可能となり、活動への関与が深まっていった。ちょうどその頃、研究会の役職交代があり、関東支部の副支部長としてお声がかかり、運営側として活動を始めることとなった。

大学改革研究会は、特定のテーマに縛られず、高等教育の未来に関心のある者たちが、組織やキャリアの垣根を越えて結びつき、自らの「やってみたいこと」を実現する場である。新卒から中堅まで多様な職員が集い、月1回の定例会・勉強会や、ワークショップ、新人懇親会など、年間を通して多様な企画が実施されている。メンバーの関心は、ＤＸ、メタバース、研究マネジメント、就労支援、教職員のウェルビーイングなど、かなり多様だ。

私にとって、最初に参加したイベントの衝撃は鮮明である。大学院で大学経営を研究している方や、他大学に転職して新しい挑戦をしている方の話は、私の中に「大学職員という職業の幅広さ」への気づきをもたらした。また、懇親会では、業務内容や本学の特徴について興味を持って話を聞いてもらうことができ、交流の楽しさを知った。

こうした外部との接点は、自大学での業務にも還元されている。例えば、文科省の方針や制度の背景知識を、イベントや雑談を通じて得ることで、単なる作業で終わっていた業務が、より深い意味づけをもって理解の上、実施できるようになった。業務で遭遇する制度の改正や用語の背景に、学びの蓄積が活かされている実感がある。

【多様なライフスタイルにも配慮】

研究会の活動の中で、特に印象的であったのはワークショップの企画運営である。『出口支援から考える、「私」ができる大学職員の役割～いま、自分にできる関わり方とは？～』というタイトルで、学生支援の在り方を多角的に議論した企画では、他大学の職員とともに「どのような学生を育てたいのか」「そのために自分の部署でできる支援は何か」といった問いを深掘りした。窓口での学生対応においても、「感じよく接する」だけでなく、「教育的視点を持った指導」の在り方を問い、実際に行うきっかけとなった。

また、子育て世代の職員を対象としたレゴ®シリアスプレイ®のワークショップでは、参加者がレゴ作品を通じて自身の内面や理想の働き方を表現し、語り合った。このような体験を通して、多様なライフスタイルへの配慮や、柔軟な運営体制の必要性を具体的に考えることができるようになった。研究会内でも、子育て中のメンバーが参加しやすいよう、ミーティング時間を寝かしつけ後の22時以降に設定したり、懇親会を休日の昼間に開催し、お子さんを同伴できるようにするなどの工夫を重ねている。

読書会もまた、学びの宝庫である。毎月1冊の書籍を分担して読み、概要と感想を共有するスタイルで、知識の幅を広げるだけでなく、他者の視点からの刺激を受ける貴重な機会となっている。例えば、「指示が伝わりにくかった理由」や「不安が怒りとして表出する仕組み」など、日常業務だけではなく日常生活でのコミュニケーションの課題に対して、応用可能な知見を得ることができた。

このように、平均して月に2～3回の頻度で活動に参加しているが、「ほどほどに関わる」ことが長く続けるコツであると実感している。無理なく、自分のペースで関われる環境が、ＪＵＡＭの良さの一つである。一方で、積極的に研究を行い、論文を執筆している方や、ＪＵＡＭ以外の学びの場でも活躍している方を見ると、大変刺激になる。大学で働く前は、学生や教員の支援を行うことしか想像できていなかったが、主体的に学び、考え、大学運営の方向性に提言を行うような、躍動的な他大学職員の姿を目の当たりにし、感銘を受けている。

【関心に基づいて企画をする】

私にとって、ＪＵＡＭに参加する最大のメリットは、和気あいあいとした雰囲気の中で、新しい知識と刺激を得られる点にある。他大学の先輩から業務の工夫を学んだり、合意形成やシステム運用のノウハウを得たりすることで、自大学の業務改善にも活かせている。さらに、他大学の「グッドプラクティス」だけでなく、「反面教師」となるような事例に接することで、自大学を客観視し、改善点を見出すヒントともなっている。これは、他の団体が行う研修と比較して、ＪＵＡＭが打ち解けた場であり、気心の知れた会員同士が多いために実現する利点であると思う。

今後の展望としては、業務への還元、ひいては学生への還元という視点を持ち続けながら、自身の関心に基づいた企画に関わっていきたいと考えている。最近では、授業効果測定の他大学での取り組みに興味があり、他大学の事例を知る機会を作りたいと考えている。また、業務外の日常生活で感じるジェンダー課題についても、研究会の活動と連動させたワークショップを構想している。

ところで先日、ＪＵＡＭ研究・研修委員会主催の説明会および体験会である『ＪＵＡＭの泳ぎ方』という企画に登壇する機会をいただいた。その中で、私のＪＵＡＭでの泳ぎ方は、「無理せずのんびり平泳ぎ」と形容した。急がず、自分のペースで浮かびながら手足を大きく動かし、時には立ち止まりながら進む。そうした関わり方が、結果として豊かな学びと成長に繋がっている。これからも、好奇心と実践への意欲を胸に、企画に関わっていきたいと考えている。

9月に研究集会

大学行政管理学会は、9月6、7日、追手門学院大学茨木総持寺キャンパスとオンラインで、第29回定期総会・研究集会を開催する。

原科幸彦千葉商科大学前学長の基調講演。財政、IR、留学、キャリア教育等をテーマにしたワークショップのほか、分科会、研究発表、事例報告がある。初参加者向けの企画も行う。会員以外の大学関係者も参加可能。参加申込締切は7月31日まで。

教育哲学会　Philosophy of Education Society of Japan

教育哲学研究

— 第130号（2024年） —

【論文】
◆ベンヤミン翻訳論における「詩人としての指導者」批判
　－青年運動期のナショナリズム批判から「翻訳者の使命」を読み直す－　浅井健介
◆徳の教育をめぐる「第二の本性」論の問題点とその克服
　－ウィリアムズとマクダウェルの行為理由論争の検討を通じて－　古舘充斗
◆エリク・H・エリクソンにおける「相互性」概念の再検討
　－遊びのなかの物・身体・他者－　濱本潤毅

【エッセイ】
◆縁側で共歓するミトコンドリア
　－あるいは、別様の他社とのコンヴィヴィアリティ－　吉田敦彦

【教育哲学を考える】
◆美術制作という研究の現場　小松佳代子

【教育哲学会の現在】
◆「教育哲学の臨床」の連載開始にあたって－企画の経緯と趣旨－
　『教育哲学研究』編集委員会　岡部美香

そのほか、書評、図書紹介、訃報、学会報告、英文摘要

お問い合わせ・お申込みは教育哲学会（メール）まで。phil.ed.soc.jp@gmail.com（バックナンバーございます）